

氏名	小井塚 ななえ
ヨミガナ	コイツカ ナナエ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第280号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 演奏家の成長におけるアウトリーチの教育的意義 —事例分析と聞き取り調査を通して—

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐野 靖
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	山下 薫子
（副査）	東京藝術大学	教授	（大学院国際芸術創造研究科）	枝川 明敬

（論文内容の要旨）

本研究の目的は、事例分析と聞き取り調査をもとに、アウトリーチによって誘引される演奏家の資質・能力とその形成過程を明らかにし、アウトリーチという「経験」の教育的な意義を考察することである。

我が国において、アウトリーチは文化芸術普及の側面から広く認知され、発展してきたが、現在では広く普及し、関わる演奏家にとっても演奏活動の一端を担う存在へと変化しつつある。また、音楽系大学では、演奏家や音楽に関わる人材育成を目的とし、アウトリーチをカリキュラムに導入する動きが活発化するなど、アウトリーチの教育的な機能に注目が集まっている。こうした動向をふまえ、本研究では、特定の演奏家の長期にわたる実践を詳細に分析検討し、個人の変容過程を丁寧に記述することを通して、アウトリーチの有効性、教育的な可能性を実証していくこととした。

まず、演奏家による自己分析と他者分析によって、聴き手の立場を意識したり、演奏家の在り方を問い直したりと、アウトリーチという「経験」を通して、演奏家の意識が変容していることが明らかになった。さらに、筆者による事例分析によって、実践の内容や方法が質的に変容していることが明らかになった。このような変容過程は、まさに演奏家の「成長」の過程といえるものであり、本研究では、演奏家の中に育った特徴的な資質・能力として、①多様な観点からの自己省察、②他者意識の形成、③臨機応変な対応力、④協働する力、⑤アウトリーチ全体をデザインする力、を導き出した。

以上の論考をふまえ、本研究では、アウトリーチの教育的意義を3点から主張した。

第一に、アウトリーチは個と集団が交差する場として機能することである。

アウトリーチでは、演奏家が主体的に音楽体験を創出しながらも、同時に一人の構成員として、共に創るという意識をもって集団に参加していなくてはならない。このように、演奏家の自己表現と集団への参加という2つの側面から、自らの活動を見直して、否定したり再考したりできるフィールドとなり得る点が教育的な特徴である。

第二に、固定された思考態度からの脱却の契機となる点である。

アウトリーチという場に身を置くことで、演奏家は、専門教育を通して培われた能力や音楽観とは異なる価値観に触れ、人々とのコミュニケーションの必然性に直面する。こうした新しいチャレンジは、ひとつの世界や同じような思考回路からの脱却を促す。アウトリーチは、思考や枠組みに揺さぶりをかけ、成長を促す教育的な機会と言える。

第三に、アウトリーチが観念を再考する学びの機会として機能する点である。

これは、上記の二点とも深く関わり、アウトリーチが、自分自身や音楽について、それを対象化し問い直す自己省察の場として機能していることを意味する。このように、多角的に事象を捉えていくことによって、

固定観念が打ち破られ、観念が更新されていく。

以上、アウトリーチの「経験」には、演奏家の内面の成長と深く結びつく長期的な影響力を持った学びが含まれていることを主張し、本研究の結論とした。

(総合審査結果の要旨)

申請者の研究は、アウトリーチのよって誘引される演奏家の資質・能力を明らかにし、演奏家の力量形成の場としての有効性を検証することと、アウトリーチの教育的な意義を示すことを目的としている。

今日、音楽のアウトリーチは広く普及し、音楽家や音楽団体、教育機関等によってさまざまな形態のアウトリーチが展開されている。そうした実践面に比較すれば、研究面はまだまだ立ち遅れているという感はないが、それでもアウトリーチの活動や手法等を中心に、近年我が国においても多くの研究成果が発表されるようになった。ただし、アウトリーチの経験による演奏家個人の変容については、ほとんど研究対象となっていない。本研究はその点に着目したもので、演奏家個人を念頭に置き、聞き取り調査や事例の分析、変容過程の記述を駆使しながら、アウトリーチの有効性、教育的な可能性を実証すべく論を進めた。

第1章では、現代社会の演奏家に求められる能力と役割について文献調査と聞き取り調査をもとに検討し、演奏家が社会や人々と関係性を構築しながら成長していく力量形成の場として、アウトリーチが有効に機能する可能性に言及した。第2章では、アウトリーチの現状と課題を明らかにするとともに、特定の演奏家のライフヒストリーを再構築し、音楽と演奏家のかかわりを検討することを通して、アウトリーチの経験が演奏家の意識の変容を促す学びの機会として位置づいていることを明らかにした。続く第3章では、第2章で取り上げた1人の演奏家の実践に焦点をあて、長期にわたる事例の分析と考察に基づいて、アウトリーチの内容が質的に変容していることを実証した。第4章では、アウトリーチによって誘引される演奏家の資質・能力として、①他者意識の形成、②多様な観点からの自己省察力、③臨機応変な対応力、④協働する力、⑤アウトリーチ全体をデザインする力を提示した。さらに終章では、演奏家の成長におけるアウトリーチの教育的意義を、①アウトリーチは個と集団が交差する場として機能する、②固定された思考態度からの脱却の契機となる、③アウトリーチが、観念を再考する学びの機会として機能する、という3点に集約した。

本論文の特筆すべきところは、特定の演奏家の長期にわたるアウトリーチ活動の資料を収集し、それらを丹念に質的に分析している点である。1人の演奏家から信頼を得てこれほど膨大な資料を提供されたということは、長期にわたるフィールドワークを真摯に継続してきたことの証しである。しかも、実践の事例分析に加えて、さまざまな立場の関係者に聞き取り調査を実施するなど多角的な検討を行い、その演奏家のアウトリーチの特徴をより客観的に示すとともに、長期にわたっての変容過程を詳細に描き出している。

章構成や概念規定、批判的な事例のとらえ方などにはなお洗練の余地があるが、アウトリーチに内在する本質的な意義を明らかにした本論文は、音楽家養成にも貴重な示唆を与えるもので、博士の学位に十分値する内容と判断し、合格とする。